慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ディドロの天才論 : ディドロの能力観及び公教育論の限界についての一考察
Sub Title	Diderot genie
Author	田沼, 光明(Tanuma, Mitsuaki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1988
Jtitle	哲學 No.87 (1988. 12) ,p.257- 280
JaLC DOI	
Abstract	Dans plan d'une universite pour le gouvernement de Russie, D. Diderot dit que la but de l'education publique est de faire des hommes vertueux et eclaires. Et, il ne pense pas que le genie est l'objet de l'education publique. Diderot distingue le genie qui cree du citoyen qui pense raisonnablement. Il dit L'homme de genie cree les choses; l'homme clairvoyant en deduit des principes; l'homme eclaire en fait l'application; l'homme instruit n'ignore ni les choses crees, ni les lois qu'on en a deduites, ni les applications qu'on en a faites; il sait tout, Mais il ne produit rien. (eclaire). L'homme eclaire et l'homme instruit ont de commun que les connaissances acquises sont toujours la base de leur merite; sans l'education, ils auraient ete des hommes fort ordinaires (eclare). Diderot pense que l'education public qui donne les connaissances ne peut former le genie. Et que la raison, la tache reglee, le regle, la technique et le gout nuisent au genie. Donc, Diderot ne pense pas que le genie est l'objet de l'education publique.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000087-0257

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ディドロの天才論
——ディドロの能力観及び公教育論の限界についての一考察——

田　沼　光　明*

Diderot «génie»

Mitsuaki Tanuma

Dans «plan d'une université pour le gouvernement de Russie», D. Diderot dit que la but de l'éducation publique est de faire des hommes vertueux et éclairés. Et, il ne pense pas que le génie est l'objet de l'education publique. Diderot distingue le génie qui crée du citoyen qui pense raisonnablement. Il dit «L'homme de génie crée les choses; l'homme clairvoyant en deduit des principes; l'homme éclairé en fait l'application; l'homme instruit n'ignore ni les choses crées, ni les lois qu'on en a déduites, ni les applications qu'on en a faites; il sait tout, Mais il ne produit rien.» (éclairé). L'homme eclairé et l'homme instruit «ont de commun que les connaissances acquises sont toujours la base de leur mérite; sans l'éducation, ils auraient été des hommes fort ordinaires» (éclaré). Diderot pense que l'éducation public qui donne les connaissances ne peut former le génie. Et que la raison, la tâche reglée, le régle, la technique et le goût nuisent au génie. Donc, Diderot ne pense pas que le génie est l'objet de l'éducation publique.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科研究生（教育学）

序

ドゥニ・ディドロの著作には，様々な天才論や天才待望論が見られる．『ロシア政府のための大学計画案』（以下『大学論』と記す）には次の一節がある．「わらぶきの家や他の個々の建物の数と宮殿の数との比が一万対一があるので，天才（génie），才人（talent），有徳の士（vertu）が，同じ比で宮殿よりもわらぶきの家から多く出るのは確実である．」[(1)] この記述はディドロが未来の理想社会の構成員として，「天才」「才人」「有徳の士」という三つの人間像を掲げていることを示している．天才は確かにディドロの待望するものなのである．しかし，同じ『大学論』においてディドロは次のように述べる．「もし教育の目的や授業の程度を大多数に合わせねばならないなら，偉大な歩みをなす天才は，時として，彼の後を歩いたり，はっていったりする鳥合の衆の犠牲となるだろう．（中略）しかし，天才を教育するのか，公教育が天才を抑えつけないことで充分である．」[(2)]「無知や怠惰によって生じる悪徳のすべてに多数の子供を任ね，そのためにそれらの子供たちを劣悪な職業にもっていくよりは，天才を迷わす危険を犯す方がよい．」[(3)] 彼は，一人の天才を教育することよりも，多教の子供を有徳の士にすることの方を重視する．『大学論』においては，さらに，「公教育に関して変化することは何もない．すなわち，本質的に状況に依存するものは何もない．公教育の目的はあらゆる時代に同様なものである．すなわち，啓発された有徳の士（hommes vertueux et éclairés）を作ることである．」[(4)] と公教育の目的を述べている．公教育の目的は啓発された有徳の士の形成にあり，天才はその目的とはなっていない．

しかし，天才はディドロの能力観においては高い地位を占め，彼の理想とする社会の中でも珍重すべき存在である．『大学論』でも，「教育が天才を抑えつけない」ことが銘記されている．

この天才重視の考え方は『エルベティウス「人間論」反駁』(以下『反駁』と記す）において，素質や個性の尊重という形で現われてくる．『大学論』でも個性は重視されるが，[5] ここには問題点があるように思われる．ディドロには天才と一般の人という，その持っている能力の全く異なる二つの人間観が存在している．そしてこの二つの人間各々に対して，素質が関わる比重や個性の意味が異なってくるのである．こうした問題はディドロの天才や啓発された有徳の士の扱いに大きく影響していると思われる．本論稿ではまず，ディドロの能力観からみて天才と啓発された有徳の士はどのように異なるかを明らかにする．その際，彼の天才像についてできる限り詳述したい．この二つの比較を通じて，『大学論』で示された公教育が扱う能力とはいかなるものか．又，公教育が扱えない能力（公教育が足を踏み込めない領域）とはいかなるものかが明らかとなろう．その上で，ディドロの能力観，人間観からみて『大学論』が占める位相も明確にしたい．

さらに，公教育では扱えない天才はいかなる教育的配慮をもって扱ったらよいかという問題を探究することになる．ここで特に注目したいのは，天才を損なうものの探究と，ディドロの公教育論の中にそうした要素が含まれていないかどうかという点である．もしそうした要素があれば，天才を公教育の対象からはずしたのはディドロの天才に対する教育的配慮と考えられよう．

最後に，こうした一連の研究を通じて，天才の個性と啓発された有徳の士の個性の問題を考えてみたい．両者の相違はいかなるものなのか，その個性をのばす教育方法はどのように異なるかといったことを考察することにより，近代教育論者の一人たるディドロの個性の意味の問題点について論究したい．この課題は「個に始まり個に帰する」という教育理想の問題点の一つにもなるのであろう．

第一章　ディドロの「天才」の概念

本章では，ディドロが天才をどのようなものと考えていたかを，彼の著作から調べていく．

A. 天才の素質，集中力の問題とその稀少性について

ディドロは，天才が世の中に非常に少ないことを述べる．「ギリシャやローマにも天才人は数える程しかいない．そして愚者や狂人は我々の世界同様あふれている．それは，天才人と呼べる怪物は常に非常に稀少であり，才人や思慮分別ある人は一般的でないというのが，永遠の法則だからである．[6]」(『反駁』)「物識り (instruit) と啓発された (éclairé) 人間の比は千対一であり，啓発された人間と先見の明のある (clairvoyant) 人間の比は百対一であり，先見の明ある人間と天才 (génie) の比も百対一である．」(百科全書項目『啓発 (éclairé)[7]』) ディドロはここで「物識り」から始めている（ここに掲げた4つの人間像については後にその性格を明らかにするが，その前には物識りにもなっていない無知な人々がいるとすれば，天才人の占めるパーセンテージは極端に少ないことがわかる．

では，天才はなぜそのように稀少なのか．『反駁』には，天才の素質の問題が述べられている．「各職業に適する素質を仮定することなしには，天才を形成する方法同様，碩学 (erudit) を形成する方法もない．[8] すなわち，元々の素質のない者は天才にはなれない．そしてその素質に適った職業に就かねばならない．」天才となるか否かは他のものに増して素質的要因が重要となる．そしてその素質に恵まれた子供は極めて少ないということであろう．この素質重視の考え方はディドロの次のような見解に連なってゆく，「教育の重要性はどこに存するか．それは，親がそうすることを好むような，一般的に分別のある最良の子供を作ることでは全くなく，子

供にとって適切なものに子供を集中させることである．すなわち，すぐれた記憶力に恵まれているならば学殖に，数と空間を容易に結びつけるならば幾何学者に，熱情と想像力があるとわかれば詩人にすることであり，他の学問についても同様である．そして，よき教育論の第一章は子供の生まれ付きの素質を理解する方法でなければならない.[9]」(『反駁』) では天才の素質とは何かという問題が出てくるが，それは後述する天才についての探究を通して明らかとなろう．

ここでは，ディドロが天才の持つ特徴の一つとして考えている集中力について言及しておきたい．彼は言う，「ある一つの重要な対象に集中された強い注意により，天才は得られるだろう．組織されたいくつかの方法によって，人は強力に精神を集中することはおわかりだろう．が．人間のうちの多くは，長く，激しく，一心不乱に振舞うことができない．彼らは，ニュートンやライプニッツやエルベティウスが時析する生活を一生涯しているのである．そういった人々は何になるか．書記である.[10]」(『反駁』) 天才の素質に適した対象に精神を集中しなければ，授かった天才を生かしきることはできない．ディドロの見解では集中力も一つの素質ということになろう．こうした集中力を持った人間は大変稀少である．さらに，ディドロは次のように述べている．「天才を授かった人間はめったにいない．二つの天才をうけた者などさらに少ない．その二つの授かり物は多分不幸であろう．人は二つの悪魔によって二者択一を迫られ，不安となり，動揺させられて，二つの大仕事に手をつけ，二つとも終えられない.[11]」(『反駁』) 二つの天才を授かった者はそれが災いして一つの物に集中できず，その天才の素質を生かすことができないのである．

こうした集中力をディドロは動物に比える．「天才人と野獣のような人とは相似しているということになる．というのは，両方共，抗し難い程唯一の仕事に自らを結びつけ，その仕事を完全に成し遂げる主な器官をもつからである.[12]」(『反駁』) 「人間について考えてみると，あなたを動物から

区別する性質にあなたがなるのは器官の弱さにおいてである．ワシのような鋭い眼を持ちたくないか．あなたは絶えず注意探く見るだろう．犬のような嗅覚を持ちたくないか．あなたは朝から晩まで嗅いでいるだろう．（中略）もしあなたの脳の中に他より強い繊維（fibre）があるならば，あなたは一つの物事以外適したものはなく，あなたは天才である．動物と天才人は似ている．[13]」（『ネロとクラウディスの統治について』）天才人と動物が同じであるとは言えないが，天才人とは，一つの事にしか適さない程，ある器官が異状に発達している者である．

集中力をもつとともに，一つの事にしか適さず，一つの事しかできない天才は，ディドロの諸著作に表現されている．「私は独創的な人や至高の人のみを評価するのであるが，彼らは，ほとんど常に，ある一つの物事において最高の点を示すが，他のすべてのものにおいては劣っているのである．[14]」（『コシャン氏のイタリア旅行について』）「彼ら（天才）はただ一つのことにしか役に立たないんです．それから先は，ろくでなしなんだ．市民とか，父親とか，母親とか，親類とか，友だちとかであることがどんなことだか，彼らにゃわかりゃしません．[15]」（『ラモーの甥』）天才の集中力が社会生活も営なめない程になるのは，確かに困ったことである．が，そこまでいけばこそ天才的卓抜さも出てくるのである．これは天才をとるか市民をとるかという重大な選択を迫られる問題である．市民形成のための公教育から天才が対象外とされる理由の一つがここにもあると思われる．天才が稀少であることはこの問題の緩和剤となるかもしれない．

B. 天才の独創性

本稿では天才の創造性，独創性といった性格について考察する．これは天才の本質的特徴とも言うべきものである．まずディドロが天才の創造性について語る部分を引用する．「天才人は物事を創造（créer）する，先見の明ある人は物事から原則を演繹する．啓発された人は物事を適切にあて

はめる．物識りは，創造されたものも，物事から演繹された法則も，物事の適用も知らない．彼はあらゆるものを知っているが何も生み出さない.[16]」「印刷物がまだなかったころの，文献のあり方を想像してみよう．著述に専念する少数の天才と，筆写に従事する多数の筆耕労働者の姿が目に浮かぶ．将来に思いを馳せ，休みなく作り出される印刷物のために汗牛充棟もただならぬ事態となった時の文献のあり方を想像してみよう．それはまた，二種類の人間に分担されていることがわかる．一方はあまり読まない．新しい，あるいは新しいと称する研究にもっぱらたずさわる．（中略）他方は，創造することのできない労働者で，日夜，これらの書物のページをめくり，収集保存に値すると判断されるものを選別することにもっぱら従事する.[17]」尚，前者の項目『啓発』において，「啓発された人」には「科学 (science)」が，「先見の明ある人」には「洞察力 (pénetration)」が対応する．物を生み出す創造という機能をもつのは「天才人」だけである．他の者はすべて既存のものを知ったり扱ったりするだけであるが，演繹する先見の明ある人は天才人に一番近い位置にいる．この二つの境は特に科学的分野においてはあまり明瞭ではないように思われる.[18]後者の項目『百科全書』にも，創造する天才と創造できない労働者という二つの人間像が浮かび上がってきている．

ディドロは，芸術，科学，哲学といった様々な分野において天才像を語る．そこでは，独創性・創造性が問題となる．以下，私は芸術の天才と科学・哲学の天才の二つに分けて彼の天才像を考察したい．

まず，芸術の天才について，ディドロは言う．「絵においても，詩においても，雄弁においても，崇高さは現象の正確な描写から生まれるとは限らず，天才的な目撃者がそこから経験する感情，彼の魂の震動が私に伝わってくる術，彼が用いる比較，表現の選択，彼が私の耳を打つ快い調べ，彼が私の中に引き起こすことができる観念や感情から生まれる.[19]」(『反駁』) ここで重要なのは，対象の正確な描写ではなく，それを表現する者の構成

する力や技術である．これは主に芸術において顕著なことである．ディドロは「自然科学者や歴史家の中には対象を（正確に描く）能力のある者がかなりいるだろう.[20]」（『反駁』）と述べ，科学や歴史においては，対象の正確な描写を重視する．ディドロの天才は，理性により正確さを追求する科学者というより，自分の美的世界を，すべてを自分に引きつけることにより創造する芸術家のイメーヂである．「独創的な人とは，自分の個性から，独特の見方，感じ方，自分の表現の仕方をもつ変わった存在のことである.[21]」（『反駁』）この天才の独創的活動には「想像力（imagination)」が関与する．想像力なしには「詩はすでに考え出されたものを適用する機械的習慣になってしまう.[22]」（『劇詩論』）独創的な天才と対照的なイメーヂで出てくるのは「模倣者（imitateur)」である．（ただし，これは例えば天才の創った詩や絵を模倣する者のことで，自然模倣する者ではない．後述するが，自然模倣は天才の創造活動で重要な位置を占める）ディドロは言う．「自然と天才の間に仲介物はないが，天才は常に自然と模倣者の間におかれる．天才は自分の活動領域にあらゆるものを強力に引きつけ，際限なく高まってゆく．模倣者は何も引きつけず，彼は引きつけられる．すなわち，彼は磁石との接触により磁化するが，自分自身は磁石ではない.[23]」（『反駁』）「もしその芸術家が酔って生まれてこないとすれば，最良の教育は彼に多かれ少なかれ，むっつりと酩酊をまねることを学ばせること以外にないだろう．そこから，ピンダロスやあらゆる独創的な著作家の平凡な模倣者が沢山出てくることになる．なぜ，真に独創的な人々は粗悪なコピーしか作らないのだろうか.[24]」（『反駁』）「むっつりと酩酊をまね」させるというのは大変な皮肉であるが，このような教育により独創的な人間は育つどころか損われるであろう．ディドロはかくの如く，天才の独創性を讃美し，模倣者を偽物とするのだが，A項で述べた通り天才は極めて稀少なものであるため，天才が作品を生んだ後は次のようになってしまう．「やがて多くの模倣者たちがついてくる．模範（modéle）が増え，観察が積み重

ねられ，規則 (régle) が置かれる．技術が生まれ，それらの限界が決められる．そして，定められた狭い範囲で理解されなかったものはすべて奇妙で間違ったものであると宣される．それはエルキュールの円柱であり，先へ進もうとすると必ず迷ってしまうのである.[25]」(『劇詩論』)

芸術家が独創的作品を生み出す時，自然模倣が重要となる．ディドロの言葉を引用する．「天才をもって生まれた人間は，自然の中にはあるが，あなた方の偏見の中にはない光景を試みるだろう.[26]」(『劇詩論』)「実社会という芝居では，熱しやすいすべての魂は舞台を占めている．天才は揃って平土間にいる．前者は狂人であり，彼らの狂態を熱心に写している後者は賢者だ．沢山の各種各様の人物の滑稽さを捉え，描き，君を笑わせるのは賢者の眼であり，君がその被害者であるところの変なうるさ型や，君自身の滑稽さを捉え，写し，笑わすのは賢者の眼だ．君を観察し，うるさ型やそれに悩まされる君の窮状を観察し，写したのは彼だ.[27]」(『逆説俳優について』)「特質が現われるのは最初の素描をする無我夢中の際ではなく，冷静な瞬間 (des moments tranquilles et froids) であり，全く思いがけない瞬間だ．(中略) それは霊感 (inspiration) に由来するものだ．自然とその素描との中間に介在して，これらの天才が注意深い眼をかわるがわる両者に向ける時に生じるのだ．(中略) 熱意 (enthouriaxe) の逆上に淬を入れるのは冷静さ (sang-froid) だ.[28]」(『逆説俳優について』) 自然模倣する天才は霊感をうけた瞬間に冷厳な眼で観察し模倣する．それがあたかも熱狂しているようにみえたとしても，凡人の熱狂とは異質のものである．自然模倣と創造性・独創性の関連はいかなるものか．18世紀の芸術を評してスタロビンスキーは次のように述べる．「自然を模倣すること，それはたんに外から自然の生産活動を観察することだけではなく，自然につき動かされ，自然の運動に加わり，その運動を延長し成就すること，自然が我々に伝えてくれる能力を用いて自然に似せて創造することとなるだろう.[29]」自然を模倣するとは自然の生産活動を内部からつき動かされて模倣するこ

とであり，外面的・機械的な模写とは異なる．自然模倣はそれ自体創造活動である．スタロビンスキーの解釈とサン＝ランベールの項目『天才』の次の記述が符合する．「天才は崇高なもの，感動的なもの，偉大なものへと飛翔するために，趣味の規則や法則をやぶる．自然の特徴をなすあの永遠の美への愛，自ら創造し，自らの美の観念と感情との原則である得体のしれない模範に，自分の絵を一致させようとする情念こそ，天才人の趣味なのである．」[30]

ディドロは別の著作で次のような見解を述べている．「理想的な絵画はその明暗の中に自然より以上のものをいくつかもっている．」[31]（『絵画についてのイギリスの一著者の抜粋』） 天才的作品は「自然と極端な詩という二本の線の間に見出される．」「真理が多くなると天才は少なくなる．」し「それを越えるとひどいものや妄想となるため詩人が越えることができない線．」[32]がある．（『彫刻と Bouchardon についての考察』） この二本の極めて狭い幅の間で天才的作品はでき上がる．この幅が天才の独創性が発揮される場となる．「常識の下には馬鹿者のはしごがあり，天才の上には狂人のはしごがある．多かれ少なかれ，すぐれた長所のある人間は非常に狭い空間しか占めていない．」[33]（『Sartir 氏宛書簡』）

次に，科学・哲学におけるディドロの天才像を述べる．彼は，ニュートン，プラトン，ライプニッツ等を天才と考える．

ディドロは言う．「天才人とは，残りの人々が目を向けていない対象に専心するよう生まれてきたような人である．」[34]（項目『ピタゴラス主義』） 「もう論じられてしまったものについて正確に考えるよりもまだ論究されていないものについて考える方が才能がいる．すなわち，才能の最高位である天才のしるしは，重要で新しい問題について真理 (vérité) を発見することである．」[35]（項目『ライプニッツ主義』） ここで天才は創造とは別の，真理の発見という役割を担っている．芸術とは異なる実用的部門で天才はこの機能をもつ．ディドロは項目『木材 (bois)』において，木材の加工に

ついて次のように述べる.「職工の明敏さというものは絶えずつかめない.そして,我々は,人々の親友たる天才人が真理を探しに来るまで,自らの誤りに固執する.さらに,天才人が真理をみつけた時,それをわかちあう勇気があることを我々は喜んで付け加えたい.[36]」この未知の真理は,人が考えもしなかったような事柄から,天才の直観的なひらめきによって導き出されてくるのであろう.地道な実証によって科学的に導き出されてくるとは考えにくい.「迅速(promptitude)は天才の特質である.[37]」(『生理学要綱』)この点で真理の発見も創造的といえるのかもしれない.

科学や哲学における天才の役割を『自然の解釈に関する思索』の二つの文章からみてみたい.「私は科学の広大な領域を,明るい所と暗い所が散在している大きな地面のようなものだと想像する.我々の仕事は明るい場所の範囲を拡げるなり,光の中心をその地面に増すことを目的とすべきである.前者は創造する天才に属し,後者はそれを完成する俊敏な人に属する仕事である.[38]」「事実を集めること,それを結びつけることは,非常に骨の折れる仕事である.(中略)一部の人たちは資料や,役に立つ勤勉な人夫を集めることで一生を送る.他の人たちは傲慢な建築家であって,それの仕上に熱中する.しかし時は今日までに合理哲学のほとんどすべての殿堂をひっくり返してしまった.埃にまみれた人夫が遅かれ早かれ,彼が盲目的に堀っている地下から,頭脳の力で建てられた,あの建物に致命的な打撃を与える小片をもたらす.建物は倒壊し,別の向こうみずな天才が新しい結合を企図するまでは,ごちゃごちゃになって散乱している材料があるばかりである.[39]」ここには二つのタイプの科学者・哲学者の像が描かれている.一方は実証に,他方は構想に関わる.天才は後者である.

実証的方法はとらず,創造・構想といった活動に関わる天才は「観識眼(l'exprit observateur)」を持つ,「私の言う観識眼のある人は努力も集中もなしにその力を発揮する.彼はみるのではなく,みえてしまうのである.彼は研究することなく学び拡がる.彼は現在の現象を何も持っていな

いが，すべてが彼に影響を与える．彼の中にあるものは，他人がもっていないようなある種の感覚であり，成功するかしないか，真か偽かを述べるめったにない器官であり，そうした事柄は彼の言う通りになってしまうのである.[40]」(『天才について』) いささか誇張の多い文章とも思われるが，こうした力が創造・構想に関わるのである．

以上，ディドロの天才像を芸術的分野と科学・哲学的分野の二つに分けて考察してきた．芸術家の独創的な作品を創造する力．科学者や哲学者の直観的に全体像を構想したり真理を発見したりする力といったものが天才の特質としてディドロが考えたものと言えよう．次章より，ディドロの教育論との関わりにおいて天才の問題を論究する．

第二章 『大学論』の位相

本章では，「天才」と「啓発された有徳の士」の比較を通して，ディドロの能力観のうちで『大学論』が占める位置を検討する．

序でも述べた通り,『大学論』で形成目的とされるのは天才ではなく「啓発された有徳の士 (hommes vertueux et éclairés)」である．この「啓発された」という言葉は先に引用した項目『啓発』と同意とみなされるので，ここから検討を始めたい．ディドロは言う．「啓発された人間は起こったことを知り，先見の明ある人間はこれから起こることを見抜く．啓発された人間は典拠 (authorité) により決定を下し，先見の明ある人間は理性 (raison) により決定を下す．物識りと啓発された人間の間には差がある．物識りは物事を知っているが，啓発された人間はさらにそれを適切にあてはめることができる．しかし，彼らは共通して，獲得した知識が常に彼らの才能の基礎となっているのであり，教育なくしては彼らはかなり平凡な人間になってしまう．それは先見の明ある人間はとても言い難い.[41]」ディドロの述べる「物識り，啓発された人間，先見の明ある人間，天才」

という能力観は，教育によって次々に上の段階へ昇っていくヒエラルキーとはなっていない．教育によって形成可能なのは，物識りと啓発された人間である．先見の明ある人間と天才は，洞察力，創造性という素質を各々持っている．そして，この二つは『大学論』のカリキュラムにより形成されるものとは考えられない．『大学論』に基く公教育は，物識りや啓発された人間を形成すべく，実証的分析的に知識を獲得することに力を注ぎ，全体像の構想や創造といった領域には足を踏み入れないのである．[42] ここに天才を除外したディドロの公教育論の一つの大きな特徴がみられる．

『大学論』は「徳 (vertu)」と「有益性 (utilité)」を中心原理として書かれている．[43]「公立学校の目的は，それがいかなる領域にせよ，学識深い人間を作ることではなく，それを無視することがあらゆる生活状態の中で彼にとって有害であり，いくつかの社会では不名誉であるような多くの知識を教える (initier) ことである．[44]」(『大学論』) また，「(論理は) 公正に考える (penser juste)，又は感覚や理性の合法的使用をなす技術である．すなわち，受けとった知識の真実性を確保し，真実の探究の中で精神をうまく導き，無知からの誤りや，欲得，感情からの詭弁を解く技術であり，それなしでは，あらゆる知識は多分人間に役に立つよりは有害であり，人間はそのため，馬鹿で愚かで邪まなものになる．[45]」(『大学論』) 啓発された有徳の士は，知識を土台とし，又論理的に考えて知識の真実性を確認し，批判的，公正に判断を下し，適切な行動がとれる人間，さらにその判断や適切な行動が有益性をもつような人間として浮かび上がってくる．これは天才とはかなり異なるイメージである．

この啓発された有徳の士の形成を目的とした公教育から天才ははずされる．『大学論』について古沢常雄氏は次のように述べる．「社会の担い手は，民衆自身ではなく，民衆の中から生まれる天才，秀才，有徳の士であることに注目しなければならない．単線型の学校制度は，このエリートを育成するための制度でもある．(中略) この大学の中で，できる子供とで

きない子供が選別され，できない子供は陶汰される．（中略）知識の量を基準として，政治家を頂点とする職業のヒエラルキーがあって，できない子供は，親の賤しい職業にあまんじて，社会的上昇などという分をわきまえない欲望は捨てることが社会のためであり，どんな職業にも楽なものはないと，諦観させる．[46]」この論文は『大学論』の公教育がエリートの選別機能を果たし，ブルジョワ市民社会の生産関係・支配構造確立の一翼を担っていることを指摘した点注目に価する．しかし，「秀才」と「有徳の士」は確かにこの公教育論によって形成され，エリートとして社会の支配層に進出するものと考えられるが，「天才」はどうであろうか，物識りと啓発された人間は公教育により形成が可能としても，天才は公教育から除外され，公教育では形成し得ない存在である．従って，少なくとも『大学論』に基づく公教育が，天才をエリートとして選別する機能を果たすとは考えられない．天才と啓発された有徳の士はその性格が異なると共に，教育方法（天才の場合は教育的配慮というべきであろう）も異なる．この点は次章で検討する．又，社会的に地位の高いエリート（秀才と有徳の士はこれに入る）と天才とはかなり異なるものである．すなわち，天才と一般的に言われるエリートとは同一視できない面が多々あると思われるが，この点についても後述したい．

森田伸子氏は『大学論』が才能 (talent) を根拠としてエリートを選抜する公教育論となっており「エリートの位置を一層確実なものとし，その地位を正当なものにするためのものであった．[47]」ことを指摘している．これによりエリートが選抜され，エリート対非エリートの図式が一層明確となる．「教育はこの才能を基準として二つの部分に分けられることとなる．一方には自ら発見し創造し認識する能力を持つ主体的動的なごく少数の人々の教育と，他方は第一の人々が到達しえたものを恩恵として受け入れる受動的存在たる多数の人々のための教育である．[48]」この森田氏の指摘は『大学論の教育目的たる啓発された有徳の士が才能を基準に様々な種類や段階

をもち，その中ですれた才能をもってエリートとなる者とそうでない者がいることを示している．啓発された有徳の士のごく一部が才人となるのである．ただし，森田氏も指摘するように，「高等教育を独占し排他的特権階級を構成してゆく」のは「天分なき才人たち」[49]であり天才ではないのである．森田氏がエリートを表現した「自ら発見し創造し認識する能力をもつ主体的能動的なごく少数の人々」は天才のイメーヂが強いように思われる．天才と才人エリートは明らかに異なる．前述したように天才は『大学論』の公教育が扱えない存在である．『大学論』の公教育により形成されるエリートとは，知的で思慮深い実務能力を身につけた医者，法律家，政治家といったものと思われる．

社会における普通の実務には，才人エリートは必要でも天才は必要ない．サン＝ランベールは次のように述べてる．「実務における天才が，情勢や法律や慣習にとらわれないのは，美術における天才が趣味の規則によって，哲学における天才が方法によってとらわれないのと同じである．彼が祖国を救いうる瞬間もあるが，もし権力を持ち続けたら祖国を滅ぼすことになるだろう．体系は，哲学においてよりも政治においてずっと危険である．哲学者を迷わす想像力は，彼にしか誤りをおかさせないが，政治家を迷わせる想像力は，彼に他人を誤らせ，他人を不幸にする．だから戦争や会議において，神にひとしい天才は，一瞬で多くの可能性を見はるかし，最上策を見抜きこれを実行する．しかし彼は，注意と計画と根気が必要な実務を，長い間扱うことはない．アレクサンダーやコンデは事件を支配し，戦闘の日，熟慮の時間がなく，はじめに浮かんだ考えが最上の考えでなければならないような瞬間に，インスピレーションをうけるようにみえる．彼らは一目で，一つの位置，一つの運動が敵味方の兵力やめざす目標との間にもっている関係を見抜かねばならない瞬間に，決断する．しかし，全戦争の作戦を指導せねばならぬ場合は，彼らよりもテュレンヌやマールボロの方がよい．」[50]『大学論』の公教育の最終段階まで昇ったエリート

とは，知的で慎張で思慮深い実務家であり，ひらめきや直観によって行動する天才ではない．同じくすぐれた者といっても，天才と才人は全く異なるのである．

これまで述べてきたディドロの能力観を図示すると次のようになる．

天　才 (génie)

先見の明ある人 (clairuoyant) ──┐
　　　　　　　　　　　　　　　　├─才人 (talent)　　} 『大学論』の領域
啓発された人 (éclairé) ═══┘　有徳の士 (vertu)

物識り (instruit)
　│
民　衆 (peuple)

（才人は啓発された人の上層部と先見の明ある人の一部を含む）

第三章　天才への教育的配慮

一般に言われるエリートと天才はその能力の内容に違いがある．と同時に教育的配慮も異なる．本章では，天才を損うものが何かを検討し，天才がその実力を発揮できるような場がいかなるものか考えてみたい．その際，公教育を天才に受けさせた場合，天才を損なう要素があるのではないかという点を合わせて検討したい．

A.　天才を損うものと天才の扱い方

まず天才を損うものとしていかなるものが考えられるか．

ディドロは言う．「天才にとっては，彼は何をするのかわからない程自分自身の主人ではない．理性のために，アカデミーはそうした人々を規則正しい仕事に従わせることによって撲滅しようとする．[51]」(『反駁』) 「規則は普通の人には役に立つが，天才人を損ってしまうのである．[52]」(『絵画断想』) 「あなたの規則を忘れ，技術は打ち捨てておきなさい．［そうしないと］天才は死んでしまう．[53]」(『Ricoboni 夫人への書簡 1958. 11/27』) サン＝ラン

ベールも「趣味の規則と法則とは天才に首かせをはめる.[54]」(項目『天才』)と述べる. これらの記述より「理性」「規則正しい仕事 (tâche réglée)」「規則 (régle)」「技術 (technique)」「趣味」といったものが天才を損うと考えられる. こうしたものに従うことが天才の創造活動を妨げてしまうのである. 既成の規則, 技術, 趣味に従うのではなく, それらを自分流のものに作り変える所に芸術的天才の本質があるし, 科学や哲学の天才は理性的に規則正しい仕事をする者ではない.

ディドロは次のようにも言う. 「人に命令される以外に天才は損われない.[55]」(『グリム宛書簡 1759. 末～5/1』)「模倣者たちは弟子を育てようとするが, 彼らは自分たちのように作ろうとしてしまう.[56]」(『反駁』)「天才人を困惑から救い出したいと思う馬鹿者程社会の中で馬鹿げて月並みなものはない. かわいそうな愚か者よ, 天才人を苦しむがままにしておきなさい. 言葉が彼らにうかんでくるだろう. そして彼がそれを言っても, あなたは理解できないだろう.[59]」(『絵画断想』) 創造する天才には他人の命令や下手な助言は邪魔でしかない. 模倣者の弟子の作り方は既存の規則通りに作品を作らせることであり, これは天才の創造活動とは相入れないものである.

もちろん天才を規則, 命令, 助言等に従わせようとしても, それはうまくいかないであろう. 天才はそれらを無視し自分の独創的な作品を作ってゆくと考えられる. しかし, そうしたものを強制することはいたずらに天才を脳まし, 彼の繊細な神経を傷付ける結果となり, 創造活動の妨げになることも多々あるだろう. さらに, 天才は独特の学習パターンや行動パターンをもっており, 普通の生活とは異なる, 自由な創造活動のできる場を与えられることが望ましい. それは, アトリエでも研究室でも屋根裏部屋でもよい. ディドロは言う. 「アトリ, ヒバリ, ムネアカヒワ, カナリアは厳しい日中にさえずり, 日没と共に頭を翼の下に押し込み眠ってしまう. その時, 天才はランプと明りをとり, 孤独で野生の, 飼いならされて

いない，物悲しいかっ色の鳥（天才）が，のどを開き，歌いはじめ，田園に反響させ，美しい調べで夜闇のしじまを破るのである.[58]」（『1765年のサロン』）

では，『大学論』の中に天才を損うものはないだろうか．先に引用したように，天才はすぐれた方の閉却児童であり，公教育に入れれば鳥合の衆の犠牲となる．又，公教育が目的とする啓発された有徳の士の能力と天才の能力とは異なるものである．『大学論』で行なわれるのは知識の伝達や理性の訓練である．この公教育の内容は天才の学習とは異質のものである．『大学論』に描かれるコレージュでの生活は常に監督され時間通り規則正しいものであり，[59]天才には居心地の悪いものとなろう．『大学論』の公教育には天才を損う要因がいくつか存在するのであり，天才をそうしたものから守るためディドロは天才を公教育の対象から除いたとも考えられる．それは一般の人を天才の犠牲にすることを避けるのと合わせ，ディドロにとっては一石二鳥となるのではなかろうか．少なくとも，彼が二つの異なった教育の場を考えたことは確かである．科学の天才について「天才は天性と身体組織と純肉体的な原因によって準備され，精神的な原因によって花ひらき，猛勉強と後天的な知識によって豊かな推測へ導かれ，その推測が実験で検証されてその名を不巧のものにする.[60]」（『反駁』）とディドロは言うが，この猛勉強や知識の獲得は公教育とは別の，天才の創造活動が自由にできるような場でなされるのがよいと考えられる．

尚，ディドロは天才と有徳の士を区別して次のように述べる．「天才人は彼が従う天才以外の動機（motif）を持たない．何と多くの興味やあらゆる種類の強力な動機が有徳の士を説き伏せ，支え，促していることか.[61]」（『美しきページを書くより美しき行為をなす方が簡単かどうか』）天才の創造活動はそれ自体何も外在的な目的をもたないものである．従って，名誉心や競争心[62]を煽って勉強させる教育方法は天才には無縁のものである．ともすれば，こうしたものが天才の創造活動を鈍らせることにもなろう．

B. 天才と社会

本稿は天才と社会の関係についてディドロが書いたものを探究する．さらに天才を生かすことのできる社会がどんなものなのか考えてみたい．

ディドロは既存の規則や趣味を固守する芸術批評家の圧力を述べている．「よい趣味，古い規則，古代の著作家，我々の父，我々の師を守り，生まれつきの天才を抑圧する[63]」(『Tru…氏に送られた序の草稿』) のが批評家の仕事である．いつの世でもこうした批評家は力をもっている．又，群衆の圧力も存在する．「他人の意見は我々自身の知識の上にある程度まで免れることのできない権威をもつ．(中略) 群衆の判断より自分の判断を選ぶことが問題である時，さらに群衆の中に唯一の声しかない時，恐ろしいことである．けれども，もし《正しいのは私だ．誤っているのはみんなだ》と敢えて言う勇気あるかたくなな魂がどの時代にもなかったとしたら，我々はどうなるのだろう．最も当を得ない控え目さは，最も偉大な天才の飛躍を止め，我々は無知に陥るだろう[64]．」(『ソフィー・ヴォラン宛書簡 1762.11/11』) 天才の突飛にみえる意見は，既存の定説を信じこんでいる人々には誤りに思え，人々は数の圧力で天才の意見をつぶそうとする．天才は自説を主張するのに臆病であってはならないし，群衆の圧力に耐え得る強い意志が必要である．

このように世にうけ入れられない天才を描く文章がディドロには多くみられる．「死後長きに渡ってからしか，当然受くべき名声を得ることがなかった著作家が何人いるだろう．それはほとんどすべての天才人の宿命である．彼らは自分の世紀の手の届く範囲内におらず，次の世代のために著作をなす[65]．」(『書籍商業についての書簡』) 「習慣と時代とが芸術上の限界に課した限界をのりこえ，手続きや公式を踏みにじる天才は不幸なるかな．彼の正当性が認められるようになるために，彼の死後長い年月が流れ去るであろう[66]．」(『リチャードソン頌』) 迫害されるのは天才の宿命とも考えられるが，そのために天才がつぶされてしまうのは避けねばならない．

天才の意見や作品をできる限り理解できる社会をディドロは望んだのではないだろうか．こうした天才の姿は，社会の中枢で仕事をする才人エリートは異質のものである．

ディドロは職業と天才について次のように言う．「自分の仕事にかかりきりの人がもし天才をもっていれば非凡な人になるし，天才がないとしてもたゆまぬ専心が彼を凡庸さ以上のものにする．各人が自分の物事にだけ従事している社会は幸福である．」[67]（『風刺Ⅰ』）天才が自分の天才を生かせる職につける社会をディドロは望む．その分野で天才は創造活動を行なう．才人も自分の才能に適った職につくことが望まれるが，彼は知的な実務を行なう．この点は天才と異なる．

結　　語

今まで述べてきたように，ディドロには能力観によりいくつかの人間像が存在した．それは「天才，先見の明ある人，啓発された人，物識り」という形で，また「天才，才人，有徳の士」という形で表現された．ここで，天才と一般の人の能力の比較を通して，彼の能力観に弱干の考察を試みて結びとしたい．

まず第１点として，『大学論』の公教育の対象となる一般の人々は，公教育で知識を与えられ，批判力をつけて，適切な判断のできる啓発された有徳の士へ形成される．と同時に，彼らは何らかの職につける才能を身につける．この『大学論』の公教育で育つ才人は，社会的に決定されている才能の多様性とヒエラルキーにより選別されたものである．この才能は有益性と結合し，個人の自然の素質と考えられ，問題とはされない．しかし，ここでいわれる才能とはディドロの考える近代社会が必要とする才能である．才人の個性とは社会的に決定されている職業と能力ヒエラルキーにより決められている側面が強い．それに対して，天才の個性は個々の天

才の主体的創造活動，独創性にある．ディドロが個性を尊重するという時，この二つの意味で個性を捉えていることに注意すべきであろう．この個性の二つの捉え方に応じて才人と天才で教育が異なってくる．

第2の問題点に移る．ディドロは天才と才人・有徳の士の2つで異なる教育を考えているのだが．これは，創造と理性・道徳が両立しうるかどうかという問題を提起する．ディドロの描く天才はデモーニッシュな存在であり道徳的とは言えない．公教育により理知的となることは逆に天才の創造性を損なうことをディドロは示唆している．彼の公教育が義務制となっていないのは天才を損わないという配慮もあったと思われる．啓蒙思想家ディドロにとってアンシャンレジームを倒し市民社会を作るため理性的世界の構築は急務であり，民衆教育論たる『大学論』もその次元で書かれている．が，それと同時に彼は創造力豊かな天才の価値を認め，それを損わないため天才を公教育の対象から外したのである．その後の近代教育史は，公教育により選別された才人エリートが社会の中心となり絶大な力を握ってゆく過程であり，創造性ある天才はその中に埋没してしまっているのではないだろうか．この点，ディドロの示唆は現代にも生かすべきと考えられる．

最後に，ディドロは創造性を天才にのみ認めているが，これはどうであろうか．天才のようなすぐれた作品を作らないにしても，一般の人々も創造的に生活しているのではないだろうか．しかし，この問題は，創造と理性は両立するかどうかの問題ともからめて深い検討が必要であり，本稿では扱い難い．

註

(1) AT 3 plan d'une université p. 433.
(2) Ibid. p. 434.
(3) Ibid. p. 526.

(4) Ibid. p. 439.

(5) ディドロの個性尊重の立場を明らかにした研究論文として，永治日出雄『エルベティウスに対するルソーおよびディドロの哲学・教育論争について—フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題—』6（愛知教育大学研究報告教育科学編 1984. 1. p. 17-30)

(6) AT 2 Réfutation suivi de l'ouverage d'Helevétius intituré l'Idomme (以下 Réf と記す)

(7) AT 14 Eclairé p. 303.

(8) AT 2 Réf p. 374.

(9) Ibid. p. 374.

(10) Ibid. p. 284.

(11) Ibic. p. 341.

(12) Ibid. p. 324.

(13) AT 3 Essai sur les régnes de Claude et de Néron p. 304.

(14) AT 13 Sur le voyage en Italie par Cochin p. 13.

(15) AT 5 Le Neveu de Rameau p. 392 (『ラモーの甥』岩波文庫，本田喜代治・平岡昇訳，p. 12-13. 1964. 7 改版)

(16) AT 14 Eclairé p. 303.

(17) AT 14 Encyclopédie p. 476. (法政大学出版局，ディドロ著作集第2巻 哲学2 中山毅訳 p. 140-141. 1980. 4)

(18) 『ナカズの考察 (Observation sur le Nakaz)』には「天才の洞察力」という表現がある。(gar 1969. p. 367)

(19) AT 2 Réf p. 330.

(20) Ibid. p. 330.

(21) Ibid. p. 330.

(22) AT 7. De la poésie dramatique

(23) AT 2 Réf p. 410.

(24) Ibid. p. 330.

(25) AT 7 De la poesie dramatique p. 307.

(26) Ibid. p. 373.

(27) AT 8 Paradoxe sur le comédien p. 368. (河出書房新社，世界大思想全集，哲学文芸思想編21美学論文集 小場瀬卓三訳 p. 260. 1960. 3)

(28) Ibid. p. 367. (翻訳 27) と同 p. 259)

(29) スタロビンスキー『自由の創出—十八世紀の芸術と思想』（白水社，小西嘉

幸訳 p. 159. 1980. 7)

(30) AT 15 Génie p. 37. (ディドロ他『百科全書』 岩波文庫，樋口謹一訳 p. 327. 1964. 7 改版) 尚，この項目はサシニランベール (Saint-Lambert) の書いたものであるが，ディドロが支持していることを考慮し掲げている。

(31) AT 13 Extrait d'un ouverage anglais sur la peintre p. 36.

(32) AT 13 Observation sur la sculpteur et sur Bouchardon p. 46.

(33) C. 9 p. 107.

(34) AT 16 Pythagorism p. 517.

(35) AT 15 Laibnitziasm p. 441.

(36) AT 13 Bois p. 482.

(37) Éd J. Mayer. Elements de physiologie. p. 206. M. Didier Paris 1964.

(38) AT 2 De l'interprétation de la nature p. 17. (法政大学出版局，ディドロ著作集第1巻 哲学1，小場瀬卓三訳，p. 121. 1976. 3)

(39) Ibid. p. 19-20. (翻訳 38) と同 p. 123)

(40) AT 4 Sur le génie p. 26-27.

(41) AT 14 Eclairé p. 303.

(42) ディドロの認識論においては，感覚により物の諸部分を知覚し，その感覚の間に比較，分析綜合が行なわれ，推理，想像，判断などの思惟を通じて全体像が捉えられる．(本田喜代治『ディドロにおける神と自然と人間』—法大出版会『フランス革命と社会思想』 p. 147. 1970. 9 参照) 一般的な簡単な物事の理性的判断は上のようにしてなされる．この合理的判断は『大学論』の扱う領域である．天才の構想や創像は独創性が要求される哲学的体系の構想・科学的真理の発見・芸術の創造である．

(43) 井上坦 『D. Diderot の教育思想—教育目的としての徳と知の関係を中心にして』 (慶應義塾大学大学院 社会学研究科 紀要第7号，p. 55-65. 1966. 7) 参照

(44) AT 3 plan d'une université p. 444.

(45) Ibid. p. 464.

(46) 古沢常雄『ディドロの教育思想—研究ノートⅠ』 (法政大学文学部紀要第21号)

(47) 森田伸子『子どもの時代』 (新曜社，1986. 4. p. 35.)

(48) Ibic. p. 35.

(49) Ibid. p. 37.

(50) AT 15 génie p. 40-41. (翻訳 32) と同 p. 332)

(51) AT 2 Réf p. 327.
(52) AT 12 pensées détachées sur la peinture p. 77.
(53) C. 2 p. 100.
(54) AT 15 génia p. 37. (翻訳 30) と同 p. 327)
(55) C. 2 p. 126.
(56) AT 2 Réf p. 410.
(57) AT 12 pensées détachées sur la peinture p. 78.
(58) AT 10 Salon de 1765 p. 250-251.
(59) AT 3 plan d'une université p. 520-524.
(60) AT 2 Réf p. 369. (翻訳 17) と同 野沢協訳 p. 347)
(61) AT 3 S'il est plus aisé de faire une bella action qu' une belle page p. 536.
(62) ディドロはジェズイットのような苛酷さは批判するとしても，讃辞，非難，賞，罰による道徳教育を認めている．(Mesrobien: Les conceptions pédagogiques de Diderot p. 73-76. U. S. A. 1913. 参照) 又，『大学論』の公教育はエリート選抜の機能を持つ以上競争は生じてくると考えられる．
(63) AT 8 projet de préface envoyé á M. Tru... p. 442.
(64) C. 4 p. 218.
(65) AT 18 Lettre sur la commerce de la librairie p. 16.
(66) AT 15 Eloge de kichardson p. 216. (筑摩書房，世界文学大系96文学論集，小場瀬卓三訳 p. 25. 1965. 11)
(67) PL Satire I sur les caractères et les mots de caractère, de professions, e. t. c. p. 1193.

尚略号は次の通り

AT: œuvre complètes de Diderot revues sur les editions originales par J. Assézat. Garnier fréres, Libraires-editeurs. Paris 1875.

C: Denis Diderot. Correspondance recueillie, établie et annatée par Georges Roth. Les éditions de minuit. Paris. 2—1956 4—1958 9—1963.

Gar: œuures politiques. Editions garniers frères. Paris. 1963.

PL: Bibliothèque de la Pléiade. 25. Editions Gallimard, Bruges. 1982.